

「魔女と呼ばれた少女」

★★★★

2013（平成25）年2月27日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督・脚本：キム・グエン

コモナ（子ども兵士として内戦に駆り出された少女）／ラシェル・ムワンザ

反乱軍リーダー（生まれ故郷からコモナを拉致する小隊の隊長）／アラン・バステアン

マジシャン（反政府軍の子ども兵士たちのリーダー的存在）／セルジュ・カニンダ

肉屋のおじさん（マジシャンをかくまってくれる親切的な親戚）／ラルフ・プロスペール

グレート・タイガー（コモナを魔女に任命する軍のカリスマ）／ミジンガ・ムウインガ

コモナの母親／スターレット・マサタ

コモナの父親／アレックス・ヘラボ

コルトン商人／ドール・マラルー

バイクの男／カリム・バマラキ

肉屋のおばあさん／セフォラ・フランソワ

親切的な警官／ジョナサン・コンベ

呪術師／マリー・ディルー

アルピノ村の師匠／ガウナ・ガウ

診療所の看護婦／レナーテ・ウェンボ

診療所の男／アレクシ・サブウェ

NGOの男／ニコラ・フランソレ

強面の男／カザディ・ザディオ

陽気な農民／ボナヴェントゥーラ・カバンバ

陽気な農民の妻／アンジェル・オキト

トラックの女性／アニエス・ムジンガ

霊柩車の運転手／モーゼ・イルンガ

2012年・カナダ映画・90分

配給／彩プロ

＜世界は広い！ここにはこんな現実が！＞

アフリカに「コンゴ共和国」という国があることは知っている、そこに「子ども兵」がいることを知っている日本人は少ないのでは？私は産経新聞によく載っている曾野綾子氏の記事を読んでいるが、彼女の文章はアフリカの現実をよく知った目で日本の現状を評価しているだけに説得力がある。

「私はコモナ。14歳」というナレーションから始まる本作は、コモナ（ラシェル・ムワンザ）という少女の12歳から14歳までの物語だが、無理矢理グレート・タイガー（ミジンガ・ムウインガ）率いる反政府ゲリラの兵士とされた彼女が、なぜ「魔女」と呼ばれるようになったの？また、マジシャン（セルジュ・カニンダ）と2人でタイガーの元を逃げ出し、肉屋のおじさん（ラルフ・プロスペール）の元に身を寄せて結婚したものの、2人の先にはどんな過酷な前途が待ち受けているの？反政府ゲリラにとっては、支給された銃は父親と同じ、母親と同じらしいが、12歳の時からそんな価値観をたたきこまれた少女の頭の中は一体どうなっているの？さらに、紛争が絶えず、不穏な情勢が続く社会では弱者にしわ寄せが及ぶのは当然で、女性のレイプは頻繁に発生しているらしい。魔女と呼ばれ、村から拉致された兵士の中でただ一人だけ生き残ったコモナがその後「タイガーの女」にされたのは当然だが、そんな中、彼女は一体どんな反撃を？

本作を観ているとコンゴでは銃はすぐ身近にあるもの、そして死も生のすぐ隣り合わせにあるものであることがよくわかる。戦後68年間平和を続けてきた日本はすばらしい。しかし、今までは、そして今は良くて、集団的自衛権の議論ですらまともにできない国が、これからも平和を守れるの？平和な国ニッポンで、アホバカバラエティー番組に興ずるのも悪くはないが、たまにはこんな映画を観てじっくりと考えてみる必要があるのでは？

＜キム・グエン監督とその視点に注目！＞

本作は2012年ベルリン国際映画祭銀熊賞・主演女優賞を受賞したうえ、カナダ映画として2013年アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされたというから立派なものだ。日本では大手シネコンでこんな映画が上映されることはまずあり得ない。案の定、大阪で上映されるのはナナゲイだけだし、マスコミ関係試写も一度きりだから、私もヘタすると見逃すところだった。そんな本作を監督したのは、ベトナム人を父親に、カナダ人を母親に持つキム・グエン監督だが、もちろん私はその名前を知らなかった。

そして、プレスシートにある「キム・グエン監督 インタビュー」を読むと、本作の脚本の発端は、「10年前に、神の生まれ変わりとして自認し、反政府軍を率いていると語るビルマの双子の少年兵をニュースで見て、現代の神話性に惹かれた」ことらしい。また、「リサーチするうちに、アフリカの子ども兵の問題に行き当たり、その人間性に興味を抱くように」なっただけらしい。日本でもヒット作を次々と生み出す映画監督はたくさんいるが、そのうちの何人がキム・グエン監督のような興味と視点を持つことができるのだろうか？日本全体が「内向き」と言われて久しいが、それが商取引の分野や教育の分野のみならず、映画の分野でも大きく進んでいることをこの「キム・グエン監督 インタビュー」を読んであらためて痛感。本作を鑑賞するについては、そんなキム・グエンと、その視点に注目！

＜残忍性と幻想性のバランスが絶妙！＞

映画冒頭、タイガーから銃を渡され、目の前に立つ両親を「殺せ！」と命令されてひるむコモナの表情が映し出される。しかし、続いて「お前が撃たなければ俺がナタで殺す」といわれると、そこで下したコモナの決断は？そんな決断を12歳の少女に迫るのはあまりにも残酷で、日本なら教育委員会をはじめ各方面から非難ごうごうだろうが、コンゴではこれが現実だ。その後に展開される、棒切れを銃の代わりに渡されてのゲリラの訓練も過酷極まりない現実だし、その中で仲間たちが次々と死んでいったのも現実。そんな中、マジシャンと一緒にゲリラから抜ける決断をしたのは立派だが、その「報復」は両親を失った時と同じような形ですべ返しを受けることに……。コモナの心の中がこんな悲しみや苦しみにいっぱいになっているためか、コモナには両親の亡霊が見えるらしい。それは両親の埋葬を済ませていないためだと考えたコモナは、いつか故郷の村に戻って両親の骨を埋葬したいと願っていたが、さてそれはいつの日になることやら……。

スクリーン上に白塗りした亡霊を登場させるという手法は本来あまりほめられたものではないが、本作ではそんな幻想的な演出がピッタリで、これによって観客の心も和ませてくれることになる。他方、本作後半から展開される、タイガーの子供を身ごもってしまったコモナの「女の武器」を文字どおり「武器」にしたタイガーへの反撃とそこからの脱出は、「えっ、女ってこんなことができるの？」とビックリするほど凄惨なものだから、それはあなた自身の目でしっかりと。さらに『ジャスミンの花開く（茉莉花開）』（04年）（『シネマルーム17』192頁参照）では章子怡（チャン・ツイイー）が雨の中一人で赤ちゃんを出産するシーンを熱演していたが、本作でも「あなたを憎み、川に捨ててしまわないよう神様に祈りながら、私は草むらの茂みで、一人であなたを生んだの」と語るシーンが登場するので、これにも注目！

このように、本作は残忍性と幻想性のバランスが絶妙だ！

＜14歳のコモナと新たなマジシャンの未来は？＞

映画はラストにクライマックスを持ってくるのが普通だが、本作のように女の子を主人公とし、その12歳から14歳までの激動の人生を切り取った映画では、ラストに劇的なクライマックスを持ってくるのは容易ではない。だって、12歳まで虐げられた生活を強いられてきたコモナにとっての劇的なクライマックスは、第1にタイガーとの対決であり、第2にイヤイヤながらの（？）出産だが、その2つのクライマックスは既に観客に見せてしまっているのだから。そんな「事情」のため、本作のラストは静かな、そして何の変哲もない日常風景の一コマのようなシーンで終わる。しかし、実はこれがまるで「シェーン、カムバック！」で終わる映画『シェーン』（53年）の名ラストシーンと同じように、多くの余韻を持たせる名ラストシーンになっている。

今コモナは無事に生まれてきた赤ん坊を胸に抱きながら肉屋のおじさんの家を目指して大きな道を歩いていたが、その時後ろから通りがかったのが大きなトラック。そして、何を思ったか、トラックの運転手はトラックを止め、彼女に乗るように合図。「お金を持ってないから……」と断ると「そんなもの、みんな持ってないよ」と言いながら再度勧められたから、コモナは赤ん坊を抱いたままトラックの荷台へ。すると、そこには既に多くの先客が。そして、誰ともなくコモナに手を差し伸べて荷台へ上がるのを手伝ってくれたうえ、隣のおばさんはコモナの赤ん坊を見て「私が抱いてやるよ」とまで。そこで、コモナはそんな声に甘えるかのように赤ん坊を差しだし、自分はその隣りで安心して横になって目をつぶり……。

戦乱に明けくれるコンゴにだって当然平和な日常はあるし、平和な時間もあるわけだが、このラストシーンはまさにそれを感じさせ、コモナとコモナがマジシャンと名づけた赤ん坊の未来への希望を持たせてくれるものだ。もっとも、本作に描かれたような現実はいくまで現実として存在するし、今後もコモナの前には厳しい現実が待ち受けているはずだが、14歳までにこれだけの熾烈な体験をしてきたコモナであれば、きっと今後もマジシャンと共にしっかり生きていけるはず。そんな思いと期待を込めて、本作の静かなラストシーンをしっかり味わいたい。